

テーマ 「貞昌院に伝わる天神おみくじ」

日時 2010年12月18日(土) 10:00-11:30

場所 貞昌院 (横浜市営地下鉄上永谷駅徒歩5分)

■貞昌院と天神様

永谷天満宮は貞昌院と一つの山(天神山)を共有しています。

明治時代までは、貞昌院と天満宮は一緒でした。貞昌院住職が、神主を兼ねていたのです。

しかし、明治時代以降、お寺と神社は分離されました。

まあ、分離されたとは言っても、現在でもお互いに協力し合って運営しています。

永谷天満宮は、勉強の神様、永谷の天神さまとして親しまれ、菅原道真公が自分の姿を鏡に映して自分で刻んだ、三つしかない木像のうちの一体をもつ神社として知られています。これが日本三体たる所以です。

菅原道真公は平安時代の人ですが、醍醐天皇の信頼が厚く、時の支配者である藤原氏と対立し、延喜元年(901)九州の大宰府に流され、延喜三年その地で亡くなりました。

文学や文章を書くことにすぐれていましたので、学問の神様として祀られています。

道真公には13人の子どもがおりましたが、その第五子・敦茂は、父の才能を受けつぎ、菅秀才と呼ばれるほどで、父の道真公も大いに期待し、三体の道真像のうちの一体をそっと渡していたのでしょう。

後に父の道真公と共に、子どもたちも都から各地に追放されることとなりますが、相模風土記によると、敦茂は永谷の郷に移されたということです。

敦茂は、天神山の頂上に立ち、はるか遠くの九州太宰府の父・道真公を慕いながら、朝夕のご挨拶をされたということです。

天神山の上には、敦茂が愛用した筆や、髪の毛を埋めたとも伝えられる、菅秀塚の碑があります。菅原敦茂がいつ生まれ、いつ亡くなったのか、詳細は不明ですが、文章博士やそのほか重要な役目に就任するなど、親子二代の学者として有名でした。

冒頭で述べた道真像は敦茂から多くの人を経て、上杉乗国に伝えられ、明応二年(1493)ここに社を造り、ご神体としておまつりしましたのが現在の永谷天満宮です。

他の二体の道真像は、道真のお墓のある福岡県の安楽寺と、生まれたところの大阪府の道明寺にあります。

■おみくじの歴史

(1) くじという言葉について

- ①「串」説(くしという言葉からくじに転化した)
- ②「抉り」説(抉りは結び目を解く道具)
- ③「公事」説(公の事を決めるのに使うため)
- ④「奇し」説(奇なことを起こすから)
- ⑤「鬪子(児)」説(鬪は中国のゲームや神事に使われた小型の円盤状のくじ発音はクで、それに小さいの意味で子をつけたもの)

「くじ」という言葉は10世紀ごろから見られ「孔子」と書かれた。
おみくじは「くじ」に尊敬・丁寧語の「御(お・み)」を重ねたもの。『日本書紀』(奈良時代)、『吾妻鏡』(鎌倉後期の史書)、『貞丈雑記』(一八四三年刊の有職故実書)、『嬉遊笑覧』(一八三〇年刊の随筆)などにも記述が見られる。
おみくじは政治の世界でもたびたび使われた。

1242年、鶴岡八幡宮で天皇を決めるのに籤を引き後嵯峨天皇が即位。
足利幕府の後継者を定めるため岩清水八幡宮でくじを引き足利義教が即位。
明智光秀が信長を焼き討ちする前にくじを引いた。

歌占い…巫女が詩を読み、それと同時に歌の書かれたくじを引いて占う。

「くじ」と「おみくじ」の分離

神仏の霊威を意識したものを「みくじ」「おくじ」、それ以外の日常的なものや趣向的なものを「くじ」と使い分けるようになった。

(2) おみくじの起源

元三大師みくじ

中国南北朝から室町初頭ごろ「天竺靈籤」が入り、「元三大師百籤」「観音みくじ」として流行した。
比叡山元三大師堂はおみくじ発祥の地とも言われる。
天台宗以外の宗派でも「元三大師百籤」は一般的に流行した。
特長は第一番大吉から第一百番凶まで、一連の番号になっていること。
みくじ筒から引き当てた番号と引き換えに紙くじをもらう。天台宗比叡山の良源師によりが人間の運勢、吉凶を五言四行の漢詩百首で詠んだのが始まりとされる。
その後宗派にかかわらず多くの寺院がこれを用いるようになり、おみくじの「虎の巻」となった。

(3) おみくじの種類

おみくじは、和歌調と漢詩調に大別できる。

- ・元三大師みくじ…五言四行
- ・その他の漢詩を使用しているもの
- ・万葉集や菅原道真の和歌を使用したもの
- ・ことわざや訓戒を使ったもの
- ・各神社の宮司が独自に作っているもの

(4) 正しいおみくじの引き方

「神仏に祈願して吉凶を占うくじ」とある。これを単純に解釈すれば、二礼二拍手で祈願をすませた後、願い事を胸に秘めながらおみくじを引くのが正しい引き方と思われる(『日本宗教事典』)

おみくじを引く者は、まず身体を清浄にし、口・手などを洗い清める。そして、法華経普門品(観音経)を三遍読誦、聖・千手・十一面観音の真言(呪文)を三三三遍唱え、三十三回礼拝して、ようやくおみくじを引く。(『元三大師観音籤』作法)

凶とは、占ったことが吉よりも勢いのないことを示す。しかし、たとえ大吉が出ても、「吉は凶にかえる」といって油断は禁物であるし、また凶が出てもやがて吉がやってくるので、落ち込むことはない。凶を引いたときは、神仏にご守護をお願いし、自分でも注意するとともに、何事も今まで以上に努力すること。中国の『易経』では、不満足な卦が出たからといって何度も占いなおすことを戒めている。

■元三大師について

一般には通称の元三大師（がんさんだいし）の名で知られる良源（りょうげん、延喜12年9月3日（912年10月15日） - 永観3年1月3日（985年1月26日））和尚は、平安時代の天台宗の僧。諡号は慈恵大師（じえだいし）。比叡山延暦寺の中興の祖として知られる。

良源は、第18代天台座主（てんだいざす、天台宗の最高の位）であり、実在の人物であるが、中世以来、独特の信仰を集め、21世紀に至るまで「厄除け大師」などとして、民間の信仰を集めている。

朝廷から贈られた正式の諡号（おくりな）は慈恵大師であるが、命日が正月の3日であることから、「元三大師」の通称で親しまれている。

慈恵大師・良源には「角（つの）大師」「豆大師」「厄除け大師」など、さまざまな別称があり、広い信仰を集めている。また、全国あちこちの社寺に見られる「おみくじ」の創始者は良源だと言われている。



48 △角大師の鬼形像である。宝塔寺の元三大師堂に使われたもので、両面がそれぞれの版となっている。一十小呂町河口七左衛門」という除刻銘があり、川崎宿の者が奉納したものとわかる。



45 角大師護符
市民ミュージアム蔵
46 角大師護符
現代
市民ミュージアム蔵
47 角大師護符
現代
市民ミュージアム蔵
品川区にある宝塔寺の元三大師堂で出しているもの。



49 角大師像
東京／宝塔寺蔵
宝塔寺の元三大師堂に伝わるもの。護符に描かれる角大師の姿を表現したものである。この大師堂の本尊は良源の画像で、角大師像は現在、その脇に祀られている。

角大師—2本の角をもち、骨と皮とに瘦せさらばえた鬼の像を表わした絵である。伝説によると、良源が鬼の姿に化して疫病神を追い払った時の像であるという。角大師の像は、魔除けの護符として、比叡山の麓の坂本や京都の民家に貼られた。

角大師
つのだいし
天台座主をつとめた良源は、正月三日に没したため元三大師と称された。加持祈禱にすべれたことから御の対象となり、鎌倉時代末にはすでに、民間でもその画像を護符として貼っていたことが知られている。角大師とは、この元三大師の鬼形像である。衆生を救うため自ら鬼形となり、この形像を置くところから鬼形を降すと習った、という伝承に基づく護符で、天台系の寺院から配られた。災難除けに広く使われ、門口に貼られたほか、村境や水田にも立てられた。

■天神おみくじについて

天神おみくじは、貞昌院に200年前から伝わる、由緒あるおみくじです。

横浜の文化財(横浜市教育委員会編)には、おみくじについて次のような解説があります。

1.御籤匣

匣は黒漆塗りの直方体で、正面に金地仕上げのうめばちの紋を描き、上端中央に竹簡の籤がでる穴を持つ。裏面には朱の「天神山貞昌院 十四世哲航大賢五修彦命代 江戸中橋証町清水舊長門弟中」の銘がある。

寸法は巾・奥行き 12.2cm、高さ 31cm。

※寛政年間(1789-1800)

2.竹簡

竹簡の籤は、平均巾 0.8cm、長さ 18.9cm。上端部に吉凶と三桁の数字番号、下端部に通し番号。

3.版木

版木は裏表両面に各2枚の版を固定したもので、一面で2種類の御籤札を刷ることができる組み版となっている。組み合わせは竹簡の番号に準ずる。札一枚の平均的寸法は横 15.5cm、縦 21cm。組み版木の寸法は 46.5cm*24cm である。

(横浜の文化財(横浜市教育委員会編)より抜粋)

おみくじの内容

吉凶・番号 概要

絵 和歌

<本文> 護り本尊・願事・病事・生死・失物・待人・お産・争事・縁談・学問・商売・結文・番号



192

御籤筆筒
江戸後期
神奈川／貞昌院蔵

193

御籤匣
江戸後期
神奈川／貞昌院蔵



194

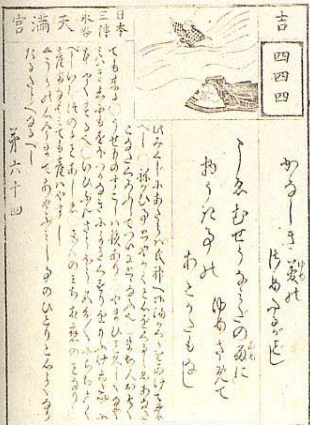
日本三体系永谷天満宮御籤版木
江戸後期
神奈川／貞昌院蔵

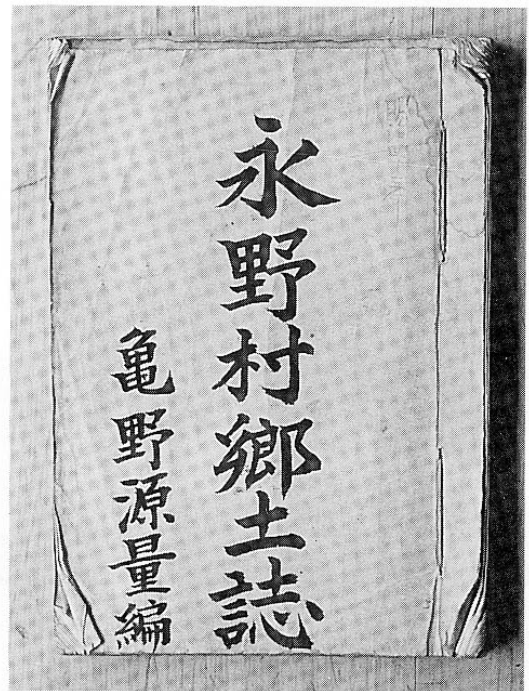
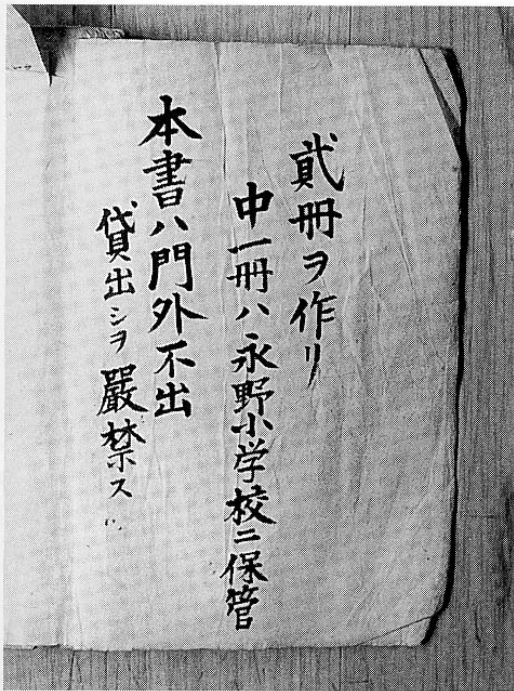
永谷天満宮の別当であった横浜市の貞昌院に伝わるもの。歌占系でもっとも普及した天満宮六十四首歌占と呼ばれるもので、観音籤の一〇〇通りに対し、六四通りである。

195

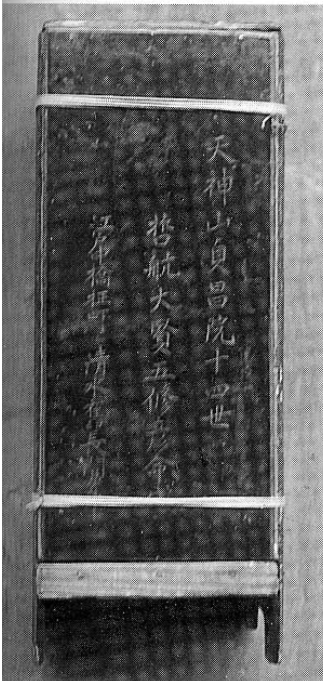
日本三体系永谷天満宮御籤
神奈川／貞昌院蔵

右上の漢数字は一から四までの組み合わせで六四種を表すもので、一は「一一」、六四は「四四四」となる。これはもと、一から四までの籤を三度引いて占った名残りであり、さらに古くはサイコロを投げ、天、地、人、空白の組み合わせで該当する歌を選んだらした。

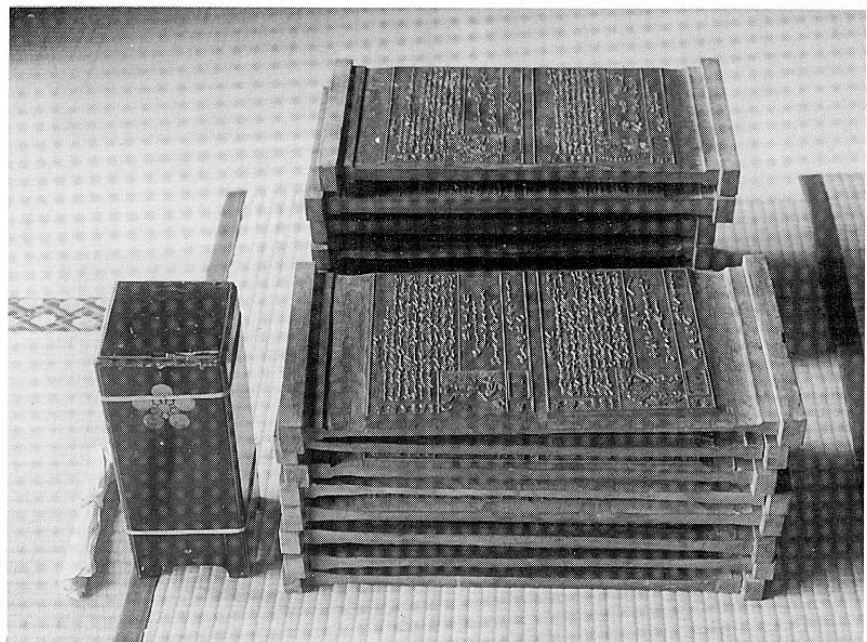




貞昌院永野村郷土誌



貞昌院神籤匣



貞昌院おみくじ版木

(七) 民俗文化財

○貞昌院 港南区上永谷町五―一―三

1、神籤匣 ※

匣は黒漆塗りの立方体で、正面に金地仕上げのウメバチの家紋を描き、上端中央に竹筒の籤がでる穴をもつ。裏面には、朱の「天神山貞昌院 十四世 哲航大賢五修彦命代 江戸中橋榎町清水雀臼長門弟中」の銘がある。寸法は幅・奥行共に十二・二cm、高さ三一cm。なお接着剤の退化にともない、匣の形状を維持するために、匣の上下に補強の紐がかけられている。

2、竹筒

竹筒の籤は、平均幅〇・八cm、長さ一八・九cmに削りあげ、上端部に吉凶と三桁の番号数字、下端部に通し番号一から六四までの数字が、墨書されている。現在の本数は、以下のように欠損、重複、番号なしなどが知られ、計七五本である。また同院から貰い受けた神籤札から各番号の主たる神託を記しておく。

- 1 大吉一一一 一
- 2 吉一一二 二(ウラ第二)
- 3 半吉一一三 三 春の駒乃 草につくがことし
- 4 吉一一四 四(ウラ第四)
- 5 凶一一一 五
- 6 凶一二二 六 玉のひかり なきがことし

- 7 吉一二三 七 うえたる人の 食にあふかことし
- 8 凶一二四 七(重複)
- 9 凶一二四 八 草の根の たえたるがことし
にハかにまつしく なるかことし
もとめざるに ふつきになるがことし
- 10 凶一三一 九 ゆくミちに 関あるがことし
- 11 大吉一三二 十 くらきミちに 灯を得たるがことし
- 12 凶一三三 十一 月の夜の くもるがことし
- 13 吉一三四 十二(ウラ第十二) わたりに舟を 得たるがことし
- 14 凶一四一 十三 枯たる木の をひいでたるがことし
- 15 大吉一四二 十四
- 16 吉一四三 十五
- 17 大吉一四四 十六
- 18 凶一一一 十七(重複)
- 19 凶一一一 十七
- 20 凶一二二 十八 羽なき 鳥のことし
- 21 吉一二三 十九 弓矢とる身の 軍神に対するがことし
- 22 凶一二四 十九(重複)
- 23 大吉一二一 廿一 鶴のくもに のるかことし
- 24 吉一二二 廿二 籠をいでし 鳥のことし
- 25 (吉一二三) 二十三 やまひに良薬を 得たるがことし
- 26 吉一二四 廿四 したしき友を 得たるがことし
- 27 吉一三一 廿五 うしなへるものの いづるがことし
- 28 大吉一三二 廿六 順風を得たる ふねのことし
- 29 吉一三三 廿七(ウラ二十七)
- 30 吉一三三 廿七
- 31 吉一三三 廿七

55	大吉三四四	四十八	すだちする 鳥のごとし
54	凶三四三	四十七	たにかけにすむ 人のごとし
53	凶三四二	四十六	日にあたる 霜のごとし
52	凶三四一	四十五	神にいのりて するしなきのごとし
51	凶三三四	四十四	山もとにすむ 人のごとし
50	大吉三三三	四十三	うれしき事の かさなるのごとし
49	凶三三二	四十二	夜の鶴の 子をおもふのごとし
48	凶三三一	四十一	行道に大きな 川あるのごとし
47	凶三三四	四十	物をうしなひ たるかのごとし
46	(大吉三二三)	三十九	にはかにたのしみ さかえたる人の ことし
45	凶三二二	三十八(重複)	すみかをうしなふ 人のごとし
44	凶三二二	三十七	水にはなれたる 魚のごとし
43	凶三二一	三十六	まれ人に あふのごとし
42	吉二二四	三十五	驚の爪 なきのごとし
41	凶二二三	三十四	ゆめにゆめを かさぬるのごとし
40	凶二二二	三十三	しるたる目の あきたるのごとし
39	(大吉二二一)	三十二(重複)	
38	凶二四四	三十一	死したる 人のごとし
37	凶二四四	三十	蛇の毒を はくのごとし
36	凶二四三	廿九	神の利生の あるのごとし
35	凶二四二	廿八(重複)	
34	大吉二四一	廿七	しらぬミちに 日のくれたるのごとし
33	凶二三四	廿六	
32	凶二三三	廿五	
31	凶二三二	廿四	
30	凶二三一	廿三	
29	凶三三二	廿二	
28	凶三三一	廿一	
27	凶三三〇	二十	
26	凶三二九	十九	
25	凶三二八	十八	
24	凶三二七	十七	
23	凶三二六	十六	
22	凶三二五	十五	
21	凶三二四	十四	
20	凶三二三	十三	
19	凶三三二	十二	
18	凶三三一	十一	
17	凶三三〇	十	
16	凶三二九	九	
15	凶三二八	八	
14	凶三二七	七	
13	凶三二六	六	
12	凶三二五	五	
11	凶三二四	四	
10	凶三二三	三	
9	凶三三二	二	
8	凶三三一	一	

56	吉四一一	四十九	れんりの 木のごとし
57	(大吉四一二)	五十	世にまれなる たからのごとし
58	凶四一三	五十一	こゑなき 犬のごとし
59	凶四一四	五十二	老てむかしを おもうのごとし
60	凶四二三	五十五	たのみなき 人のごとし
61		五十五(重複)	
62	吉四二四	五十六	たからをば ひろうのごとし
63	(凶四三一)	五十七	乱れたる世に すむのごとし
64	(吉四三三)	五十九	岩根うごき なきのごとし
65	凶四三四	六十	薄きこうりを ふむのごとし
66	凶四四一	六十一	
67		六十一(重複)	
68	凶四四二	六十二	かいこのまゆ ごもりのごとし
69	(凶四四三)	六十三	鏡のわれ たるのごとし
70	吉四四四	六十四	かなしき夢の さめたるのごとし
(註) 欠損は以下の三本である。			
	凶四二二	五十三	火のしばを やくのごとし
	吉四二一	五十四	まち人の きたるのごとし
	半吉四三一	五十八	かたきに 行あうのごとし

(一) 内の吉凶は版本による。凶は凶と表記している。
 銘なしが五本ある。重複は全て番号のみ記されている。

3、版本 ※
 版本は表裏両面に各二枚の版を固定したもので、一面で、二種類の神籤
 札を同時に刷ることができるとなっている。組み合わせは、前記

竹簡の番号に準じている。組版枚数は計一六枚、札の種類は六四種類となる。版一枚の平均的な寸法は、横一五・五cm、縦二二cmを計る。また組版の同寸法は、四六・五cm、二四cmを計る（図版参照）。

4、吉凶の割合

大吉 六四分の一 一八・七五%
 吉 六四分の一七 二六・五六二五%
 半吉 六四分の一 三・一二五%
 凶 六四分の三三 五一・五六二五%

大凶は存在しない。

（岸上興一郎・森 芳枝）

<p>日本 三休 永谷 宮 満 天</p>	<p>吉 一一二</p>
<p>(絵)</p>	
<p>いくべし○うせ物いづる○まち人きたる○産やすし女子 なるへし○いひぶんかつへし○ふさいのむすひゑんあるべし しかも中よく子あつてすゑはんじやうすべし○がくもん 入学よくすゑとをる○あきなひ事よろづ買をき七 八ぶんの利を得べし ▲うたうらのこ、ろうれしき事当ぶんながら逢て事 のと、のふる心なればいかにも吉なり 第式はん</p>	<p>こいしき人に あふがことし いのり みたらし 川の あふせ わた らん 神の ちかひの すゑとげて</p> <p>此みくしにあたる人はいりん観音をおがむ べし○ねがひ事八ぶんなるへし○やまひ事 少しをそくとも本ぶくすべし○いきしには</p>



資料 印刷技術の主要なあゆみ

紀元前

4000 ころ (バビロニア) 押圧印刷、いわゆる瓦書始まる

3500 ころ (エジプト) 水草パピルスの茎を加工して書写の材料にする

2000 ころ (エジプト) 現存する世界最古のパピルス文書「パピルス・プリス」完成

1200 ころ (フェニキア) アルファベット作成

220 (西部アジア) パーチメント (羊皮紙) ができる

紀元

105 ころ (中国) 蔡倫が樹皮、麻くず、古魚網などの繊維から紙をつくる

285 日本に漢字と墨の製法および紙が伝わる

610 中国の製紙法伝わる

7世紀末～8世紀初 (中国) 木版印刷始まる

770 「百万塔陀羅尼」印刷

868 (中国) 「金剛般若波羅蜜経」印刷、現在最古の印刷書籍

960～1279 (中国) 宋時代、木版印刷と出版が盛んに

1041～1049 (中国) 畢昇、陶製の膠泥活字をつくる。

1195 「成唯識論述記」(春日版) の版木つくられる

1314 (中国) 王慎が「農書」22巻を木活字により刊行木活字の製法、文選、植字、印刷工程を記す

1403 (朝鮮) 太宗官立の銅活字鑄造所設立

1430 (ドイツ) 初めての銅版彫刻

1440 (オランダ) コスター、木活字を試作

1445 (ドイツ) グーテンベルグが活版印刷術を發明

1455～56 (ドイツ) 教皇の命によりグーテンベルグが「免罪符」を初めて印刷

1457 (ドイツ) 初の3色刷り

1460 (イタリア) フィニゲラが彫刻凹版印刷の技法を考案

15世紀末～16世紀初 (イタリア) マヌティウス、約20年間に120点の本を刊行する。

1513 (ドイツ) グラーフがエッチング (腐食凹版) を工夫

1536 (イタリア) 最初の活版刷り新聞「カゼッタ」ヴェネツィアで発行

1590 バリニャーニが西洋活字と印刷機を携えて来日「キリシタン版」約30点の本を刊行

1607 徳川家康の命で林道春が「大蔵一覽集」11巻刊行、銅活字による駿河版

1608 角倉素庵、本阿弥光悦ら「伊勢物語」などを木活字で刊行、嵯峨本、光悦本

1642 (ドイツ) シーゲンがメゾチント凹版法を發明

1665 (イタリア) ボルタ、携帯用暗箱を發明、写真の始まり

1765 浮世絵画家鈴木春信、版木師と協力し多色版画を完成「錦絵」のおこり

1768 (フランス) シャン・パプチストがアクアチント凹版法を發明

1783 司馬江漢、オランダ人から腐食による彫刻銅版法を習い、銅版画制作

1798 (ドイツ) セネフィルダーが石版印刷術を發明 (イギリス) 印刷能力毎時 250～300 枚に

1802 (イギリス) ウェッジウッドが感光紙で塩化銀に写真をうつす方法を開発

1808 (アメリカ) パーキンスが銅凹版法を完成 (ドイツ) 初の石版多色印刷

1812 (ドイツ) ケーニッヒとパウアーが蒸気動力による円圧式印刷機を完成、印刷能力毎時 1100 枚

1813 (フランス) ニエブスが石版石にアスファルトを塗り、写真版をつくる

1824 (フランス) ニエブスとダゲール、写真凸版開発

1829 (アメリカ) ジョンソン、活字鑄造機を發明

1837 (フランス) ダゲールがダゲレオタイプ發明、写真術の祖

1837～1845 英・独・仏3国でこの時代、手漉き工業の多くが機械漉き製紙業に転換

1839 (イギリス) ポントン、重クロム酸アルカリ液の感光性を発見

1846 (アメリカ) ホー、輪転印刷機制作、印刷能力毎時 8000 枚

1848 長崎通詞本木昌造、オランダから活字と活字印刷機購入

1852 (イギリス) タルボット、重クロム酸ゼラチンで写真凹版制作

1853 (フランス) ニエブス (上記ニエブスの甥)、カラー写真考案

1854 (フランス) ボアトバンがコロタイプとカーボン印刷法を發明

1867 (アメリカ) タイプライター実用化

1869 (フランス) オーウロン、3色写真法の原理を確立

1870 日本初の民間活版業・最初の洋式活版刷り日刊紙「横浜新聞」創刊

1875 イタリア人キヨソネ来日、日本印刷界に貢献

1876 佐久間貞一ら、京橋に活版印刷業秀英舎創業

1879 (チェコ) クリツチュがグラビア印刷法を考案、1909 制作

引用資料一覧

『かながわおもしろおみくじ散歩』	島武史著 かもめ文庫	1999年
『まじないと占い』解説図録	川崎市民ミュージアム	2001年
『切絵図・現代図で歩く江戸東京散歩』	古地図ライブラリー 人文社	2003年
『横浜の文化財』横浜市文化財総合調査	横浜市教育委員会	1992年